

実践してみよう！ サイエンスコミュニケーション

日時: 平成18年7月4日(火) 13:00~16:00

場所: 総合研究棟 A 公開講義室(A110)

講師: 由利 伸子・古郡 悦子

司会: 武原 信正(ライフ・サイエンス出版株式会社社長)

<講義の概要>

昨年7月から3回にわたって行った『サイエンスコミュニケーション講座(武原・Tom Lang・別府文隆)』を受けて、今回の講義では、「サイエンスコミュニケーションのリテラシーを習得するためには、具体的にどのような勉強を重ねてゆけばよいか」を演習を交えて体験してもらおうと考えます。

例えば、市民講座で講演を頼まれたら何をどう語りますか？新聞記者の取材にはどんなふうに応じればよいでしょうか？広報誌に記事執筆を依頼されたらどうしますか？

そのコツをつかむ一歩をまず踏み出してみましよう。科学を伝えることの必要性和重要性はますます大きくなっています。

由利 伸子

(有)サイトック・コミュニケーションズ代表・プロデューサー

(株)サイエンス・アンド・テクノロジー・コンテンツ取締役(物理・工学・ソフトウェアなどを担当)

東京工業大学理学部応用物理学(現物理学)卒業後、スタンフォード大学リサーチフェロー(1994~95年)を経て、フリーランスとして「日経サイエンス」、「ニュートン」など科学雑誌の編集、一般誌への科学技術記事の執筆、ラジオやテレビの科学番組の解説者・司会者(NHK 第一放送、教育TVなど)、日経産業新聞インタビューア(トップ対談)、科学技術セミナーの企画およびコーディネーター(西日本 新聞主催など)をつとめる。

三田出版(株)テクノビジネス誌発刊プロジェクト参加・副編集長などを経て、1998年にサイトック・コミュニケーションズを設立

著書: 「日本を支える人と技術」(文芸春秋) 1985 共著
「成功にはわけがある」(朝日新聞社) 2002 共著
「考えるコンテンツ スマートタイプ」(丸善) 2006 共著

古郡 悦子

(有)サイトック・コミュニケーションズ プロデューサー

(株)サイエンス・アンド・テクノロジー・コンテンツ取締役(化学・ライフサイエンス・科学史分野などを担当)

東京大学理学部化学科卒業(天然有機化学専攻)、同教養学部教養学科科学史科学哲学分科卒業後、マサチューセッツ工科大学リサーチフェロー(1993~94年)を経て、日本ロシュ(株)リサーチセンター(スタッフサイエンティスト)、(株)デーエムページジャパン(「ドイツ医学週報」編集長)、未来工学研究所(主任研究員/兼任)、三田出版(株)(取締役編集長)などに勤務。

著書: 「未来を拓く」(東京化学同人) 1987 共著
「生と死の境界」(国際医学出版) 1987 共訳
「生命倫理の基礎」(東海大学出版会) 1991 共著
「リアルタイム MIT」(東京化学同人) 1995

※サイエンスコミュニケーション特講 I の履修者は Part I, II (7/4,5)とも出席してください。

※サイエンスコミュニケーション特講 I に参加を希望する学生は、**生物学類長室で登録を行いますので、申し出てください。**

生物学類

科学記事の書き方

—科学ジャーナリズムと研究者との境界—

日時: 平成18年7月5日(水) 13:00~16:00

場所: 総合研究棟 A ゼミ室(A111)

講師: 浦山 毅(うらやま たけし)

理系編集者。筑波大学生物学類(医生物学コース)3期生。卒業後、自然科学系出版社に勤務し、おもに生物科学系の辞典や書籍を編集するかたわら、科学・技術記事、単著・共著の本などを執筆。つくば生物ジャーナルにも国立大学法人化や科学コミュニケーターに関する論文を執筆している。

<講義の概要>

これからの研究者は、科学論文だけでなく、客観的な科学記事が書けることも要求されます。どうやって企画をたてればよいのか、どうやって構想をまとめたらよいのか、どうやったらわかりやすい文章を書くことができるのか、そして、メディアへはどうやって発表すればよいのかななどを、理系編集者の眼を通して語っていただきます。

<キーワード>

魅力あるテーマ
科学記事の特殊性
わかりやすい文章
電子編集

※サイエンスコミュニケーション特講 I の履修者は Part I, II (7/4,5)とも出席してください。
※サイエンスコミュニケーション特講 I に参加を希望する学生は、[生物学類長室](#)で登録を行いますので、申し出てください。